

市川市国府台遺跡第13地点(5)

— 地域自主戦略交付金委託埋蔵文化財調査報告書 —

平成25年3月

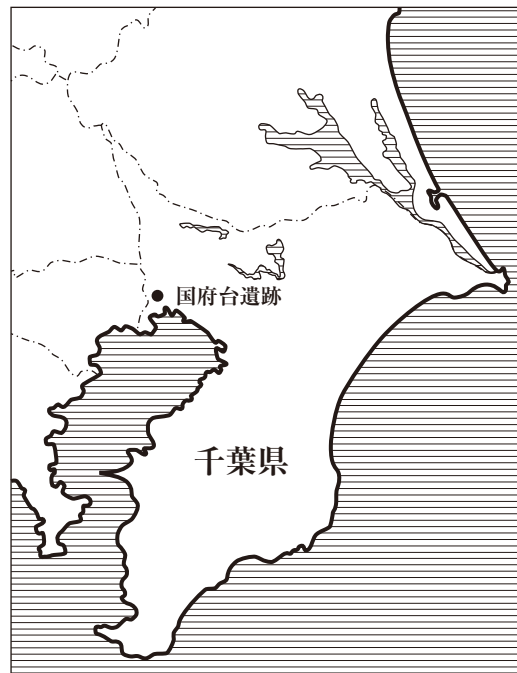
千葉県県土整備部

公益財団法人 千葉県教育振興財団

いちかわ こうのだい

市川市国府台遺跡第13地点(5)

— 地域自主戦略交付金委託埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第710集として、千葉県県土整備部による県道市川松戸線の道路改良事業に伴って実施した、市川市国府台遺跡第13地点（5）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡を中心とする集落跡が検出され、周辺のこれまでの調査成果とあわせて下総国府周辺域の状況や変遷を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邊 清 秋

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による県道市川松戸線の道路改良事業に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、市川市国府台一丁目2-2の一部に所在する、国府台遺跡第13地点(5)(遺跡コード203-003(5))である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受けて、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 関口達彦、調査2課長 橋本勝雄の指導のもと、主任上席文化財主事 四柳 隆が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成24年10月1日～平成24年10月31日
整理作業 平成24年11月1日～平成24年12月28日
- 5 本書の執筆及び編集は、主任上席文化財主事 四柳 隆が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部葛南土木事務所、市川市教育委員会、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
国土地理院発行 1/25,000 地形図「松戸」(NI-54-25-2-1)
国土地理院発行 1/25,000 地形図「船橋」(NI-54-25-2-2)
市川市発行 1/2,500 都市計画基本図No.8 (IX-KE 91-2)
- 8 本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり、測量系は世界測地系による。

目 次

序 文	
凡 例	
第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1. 調査の経緯と経過	1
2. 調査の方法	3
第2節 遺跡の位置と環境	4
1. 遺跡の位置と地理的環境	4
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	5
第2章 検出された遺構と遺物	8
第1節 遺 構	8
1. 竪穴住居跡	8
2. 土 坑	15
第2節 遺構外出土遺物	19
第3章 まとめ	20
第1節 検出された遺構の変遷	20
1. 出土土器の変遷	20
2. 集落の変遷	22
第2節 国府との関連	23
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	調査範囲とグリッド配置	2	第8図	SI-002	12
第2図	グリッドの呼称法	3	第9図	SI-003	13
第3図	立川ローム層基本層序	4	第10図	SI-004	14
第4図	遺跡の位置と周辺の遺跡	6	第11図	SK-001～007	17
第5図	遺構配置図	8	第12図	SK-008	18
第6図	SI-001(1)	10	第13図	遺構外出土遺物	19
第7図	SI-001(2)	11	第14図	土器編年表	21

表目次

第1表	竪穴住居跡の時期区分	22
-----	------------	----

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版4	SK-001～006・008
図版2	SI-001・002・SK-007		立川ローム層基本層序
図版3	SI-003・004		調査風景
		図版5	出土遺物(1)
		図版6	出土遺物(2)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

千葉県県土整備部は、主要地方道市川松戸線の慢性的な渋滞の解消策として、市川市国府台地区において道路改良工事を計画し、これまでも道路拡幅などが段階的に行われてきた。事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、千葉県県土整備部と千葉県教育庁教育振興部文化財課とのあいだでその都度協議が行われ、事業の公共性と緊急性から今回もやむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査は公益財団法人千葉県教育振興財団に委託して実施することとなった。

今回の事業地は、独立行政法人国際医療研究センター国府台病院の正門の南側にあたる。現在、市川松戸線から里見公園方面へ西に分岐する市道との交差点と、市川松戸線の東側にある国府台病院の正門は南北に20mほどずれており、それぞれに信号が設けられている。さらに正門の北側100m以内にはじゅん菜池緑地方面と往来する一方通行路が2本東へ分岐しており、ここにも信号がある。約120mの間に都合4基の信号が設けられていることが、市川松戸線の慢性的渋滞の大きな原因となっている。そこで千葉県県土整備部は、国府台病院の正門を20mほど南へ移動し、病院への進入路を付け替えて里見公園方面からの市道と一直線にして信号を減らす計画をたてた。事業地が国府台病院の敷地内であり、駐車場の舗装をはじめとする地上構築物や植栽・立木、現在も使用されている水道管などの埋設物も存在することから、その取扱いについても協議が重ねられた。

今回の調査の対象面積は352㎡と狭小である。平成22年度に実施した同じく市川松戸線の拡幅工事に伴って実施した発掘調査(千教振2011b)や、国府台病院の施設の新築や増改築に伴って当財団が実施した発掘調査(千文セ2001、千教振2012a・b)の成果から、遺構が存在することは確実に判断されたため、上層については確認調査を省略して全面を本調査の対象とすることになった。下層については、確認調査を実施して本調査の要不要を判断することとなった。

本書で報告する市川市国府台遺跡第13地点(5)は、行政的には市川市国府台一丁目2-2に所在する。発掘調査は平成24年10月に実施し、調査終了後引き続き整理作業と報告書刊行の作業を行った。実施期間・組織と担当者・作業内容は以下のとおりである。

期 間	平成24年10月1日～平成24年10月31日(発掘 確認・本調査)
	平成24年11月1日～平成24年12月28日(整理)
組 織	調査研究部長 関口達彦 調査2課長 橋本勝雄
担当者	主任上席文化財主事 四柳 隆
内 容	調査対象面積 352㎡
	確認調査 下層 8㎡／352㎡
	本調査 上層 352㎡
	整理作業 水洗・注記～報告書刊行



X=27.960

X=27.980

X=28.000

X=28.020

X=28.040

X=28.060

X=28.080

X=28.100

X=28.120

Y=6.420

Y=6.440

Y=6.460

Y=6.480

2

3

4

5

6

7

8

9

10

A

B

C

D

(3) A区

(3) B区

(5)

23.8

24.2

23.58

23.6

23.1

21.9

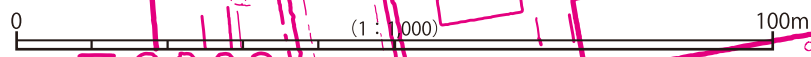
22

21.9

22.5

23.0

22.9



▽ Q002

第1図 調査範囲とグリッド配置

歯科大学

養部

歯科大学 養学部

ポクラテスホール

国立精神神経

国府台

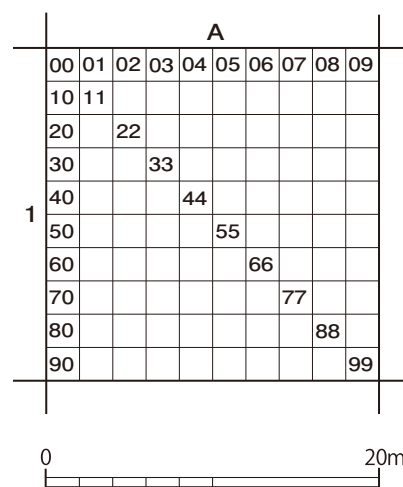
今回の調査では、調査区の多くが駐車場として使用されていたことから、舗装のアスファルトは事業者によって撤去が完了していたものの舗装の基礎となる碎石層は厚く、また車輛の走行に伴って表土層は激しい填圧を受けており、重機をもってしても表土除去には相当の困難を伴った。この填圧は遺構の覆土や立川ローム層第Ⅲ層まで及んでおり、調査にあたっては大きな障害となった。緑地となっていた範囲にも古くに植栽されたと思われる大木の根が数本残っており、また強靱な根をもつシュロなどが多く植えられていたことから、こちらの表土除去にも時間を要した。調査中に判明したことであるが、国府台病院が戦前・戦中に陸軍病院であった頃はその正門は里見公園方面からの市道の正面にあつたらしく、その部分の表土中には当時のコンクリートによる舗装や基礎の玉砂利、門柱や石塀に使用されていたと思われる大谷石、使用済みの土管などが大量に含まれていた。今回の道路改良工事に伴う国府台病院の正門の移設は、戦中の陸軍病院時代の位置に戻す工事ともいえるものだったのである。遺構確認面を検出したところ、ある程度予想されたことではあるが埋設管の設置に伴うと思われる攪乱が縦横に走り、特に市川松戸線に隣接する付近では、遺存している部分より攪乱されている部分のほうが多いのではないかと思わせるほどであった。さらに、陸軍病院の正門だった頃にも車輛の往来は頻繁だったようで、現在の駐車場部分にもまして填圧により硬くしまっていた。

こうしたなかで検出された上層遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒と土坑8基である（第5図）。攪乱された範囲の大きさから考えると、土坑のような小規模な遺構はさらに多く存在していた可能性がある。下層確認調査の結果、立川ローム層第Ⅲ層はある程度遺存しており遺構確認面が大幅に削平されていることはないことが判明しているが、SI-002のように検出された深さが2cm～3cmとごくわずかである遺構も存在することから、もともと深さのない遺構は遺存していない可能性もある。

下層確認調査は、2m×2mのグリッドを2か所設定し、計8㎡（調査対象面積の2.3%）について実施したが、石器は出土しなかったことから確認調査で終了となった。なお、立川ローム層の堆積状況については第3図に示した。遺存状況自体は良好で、立川ローム層上面から武蔵野ローム層上面までは約180cmと深く、第2黒色帯の黒味が強いという東葛飾地域の一般的な特徴を示している。

2. 調査の方法

調査区の設定は、平成21年度から22年度に国府台病院の施設建て替えに伴って実施した国府台遺跡第13地点(2)の調査以降、平成22年度の市川松戸線拡幅工事に伴う国府台遺跡第13地点(3)、平成23年度の国府台病院宿舍建設に伴う国府台遺跡第13地点(4)と踏襲されてきたグリッドにしたがった。すなわち、 $X = -27.940$ 、 $Y = 6.420$ を北西側の起点として一辺20mの大グリッドを設定し、北から南へ1・2・3…、西から東へA・B・C…として両者を組み合わせて表記した(第1図)。さらに、東西・南北をそれぞれ10等分して2m四方の100区画に分割し、これを小グリッドとした。小グリッドは北西隅を00、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…として北東隅が09、南西隅が90、南東隅が99とした(第2図)。各グリッドの呼称法は、大グリッドと小グリッドを組み合わせて7C-50などとしている。



第2図 グリッドの呼称法

平成 22 年度の市川松戸線事業に伴う調査では、電子平板による遺構実測作業を試行した。測量業者に委託し、現地で調査担当者の指示する線を電子平板によって実測した。得られたデジタルデータから測量業者が遺構図面を作成し、修正を加えたうえで納品となった。基準点測量から電子平板実測、遺構図面にかかる一連の作業は、空間情報サービス株式会社に委託した。遺構の写真撮影もデジタルカメラで行い、図版作成はパソコン上で行った。この遺構図面と写真図版、遺物実測図、原稿などをパソコン上で編集して報告書を作成し、デジタルデータにより印刷業者に入稿した。この調査が、当財団がデジタル機器を活用して発掘調査から報告書の作成までの一連の作業を行う嚆矢となった。

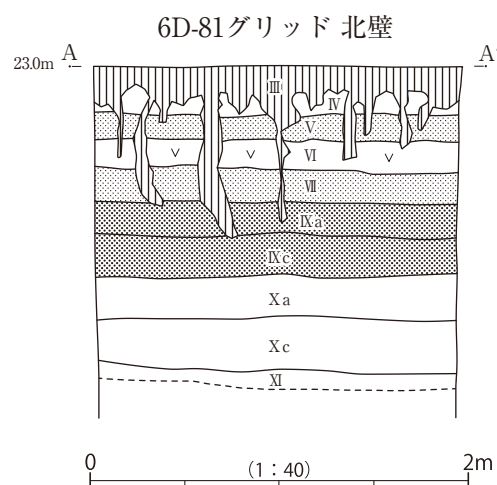
今回の調査では、遺構の実測作業は当財団が平成 23 年度から順次導入を進めている遺構実測支援システム(株式会社 CUBIC 製『遺構くん』)を用いて行うこととし、基準点測量のみを前回調査のデータを持つ空間情報サービス株式会社に委託した。遺構図面の作成は土層断面図も含めてすべて『遺構くん』を使用しており、現地では紙ベースの遺構図面は一切作成していない。遺構の写真はデジタル一眼レフカメラとデジタルコンパクトカメラによって撮影することとしたが、念のため従来どおり 35mm フィルム(モノクロ・リバーサル)とブローニー版フィルム(6×7モノクロ)による撮影も併用した。なお、写真図版にはすべてデジタル一眼レフで撮影したデータを使用している。整理作業は、挿図・図版の作成から編集にいたるまで、基本的にパソコン上で行っている。平成 24 年度より、県土整備部を事業者とする県道整備などの小規模な調査のほとんどは、この方式で報告書を作成している。

第 2 節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

国府台遺跡は、江戸川左岸の国府台と呼ばれる標高 23 m～25 m の台地上に立地する。河口から 15 km ほどさかのぼった地点の東側にあたる。江戸川に面する斜面は比高差 20 m を超える急斜面になっており、広く斜面林に覆われている。江戸川をはさんで西側には標高 2 m 前後の低平な東京低地が広がっており、近くには平成 24 年 5 月に完成した東京スカイツリーを、遠くには丹沢山地や富士山を望むことができる。

遺跡の乗る国府台(台地)は下総台地の南西端にあたり、西を江戸川、東をじゅん菜池付近に谷頭を持つ六反田支谷(または不入斗支谷)に画され、松戸市矢切付近から南に延びる幅約 1 km の平坦な台地である。台地南端は急崖を介して真間川の低地に面しており、やや東に延びる先端部は須和田台と呼ばれる。なお、古代には急な崖のことを「ママ」といい、国府台の南側に広がる「真間」という地名は、国府台の崖を示す言葉が地名になったという指摘がある(市川市教委 2006)。須和田台の南東端は緩斜面を介して須和田砂州の微高地へとつづき、真間川と国分川の合流地点付近まで延びている。六反田支谷をはさんで東側は国分台と呼ばれる台地で、下総国分寺跡や国分尼寺跡が立地する。国分台の東側は国分川によって形成された広大な国分低地に面しており、対岸は国指定史跡曾谷貝塚のある市川市曾谷や稲越の台地である。国分台の北側は国分低地から北西に延びる道免き谷津によ



第 3 図 立川ローム層基本層序

て開析され、対岸には国指定史跡堀之内貝塚や権現原貝塚などが立地している。

国府台の西側斜面下の江戸川や南側斜面下の真間川付近は縄文海進ピーク時の汀線にあたり、「真間」という地名の由来となったという急崖は、縄文海進ピーク時の波濤によって形成された海蝕崖である。その後、海岸線は一進一退を繰り返しながら徐々に退いていき、その際に須和田砂州、市川砂州といった砂堤帯や旧江戸川沿いの自然堤防などが形成された。市川砂州の発達に伴って、国府台に下総国府があった古代には現在の真間川低地に「真間の入江」とよばれる湖沼が形成されていたことがわかっている。市川砂州上には駅路(古東海道)がとおり、砂州の西端は井上駅家の推定地となっている。8世紀後半には、井上駅家から北に分岐して手賀沼の北岸をとおり常陸国にいたる駅路が開かれたと推定されており、このルートはまさに現在の市川松戸線のルートと合致する。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

国府台遺跡は、松戸市との市境付近から南側の台地上ほぼ全域という広大な範囲にわたっており、法皇塚古墳や明戸古墳、弘法寺古墳などからなる国府台古墳群、古代の下総国府推定地や下総総社跡、中世の国府台城跡などを含んでいる。第○地点という地点名は、発掘調査履歴の整理・把握のために市川市教育委員会が便宜的に与えた名称で、平成20年度までに第131地点に及んでいる。その多くが個人住宅の建設や小規模な宅地造成に伴う調査で調査面積もわずかであるが、第3地点は真間山弘法寺の境内全域、第4地点は千葉商科大学のキャンパス全域と広い範囲を対象としている。

第13地点は国府台病院の敷地内全体を対象としている。第13地点のうち市川市教育委員会が実施した調査には第13地点-1のような枝番が付され、平成15年までに8次にわたる調査が行われている。当財団が実施した調査には第13地点(1)のような枝番を付しており、今回の調査で(5)となった。ちなみに(1)・(2)・(4)は国府台病院の建物の建て替えや新築に伴って、(3)と今回は県道市川松戸線の改良工事に伴って行った調査である。

国府台遺跡のこれまでの調査成果や周辺の遺跡の内容については既刊の各調査報告書に詳細にまとめられており、特に下総国府に関連して下総国分寺や国分尼寺、駅路の成立と変遷、万葉集に歌われた「真間の手児奈」といった周辺の歴史的景観については、市立市川考古博物館などによる精力的な研究の成果が公表されている。そこで今回は、比較的最近調査が行われた遺跡を中心に周辺の遺跡について簡単に触れるにとどめることとしたい。

下総国分寺の東側、国分台から国分川へと下る斜面部から低地部にかけて立地する北下遺跡は、東京外かく環状道路(以下、外かん道と省略する)の建設に伴って調査され、斜面部からは国分寺創建時の瓦窯2基が、斜面下部の微高地からは奈良時代以降と推定される梵鐘鑄造遺構が検出された(千葉県教委2008、千教振2011a)。低地部の国分川旧河道からは人面墨書土器や斎串など、奈良・平安時代の祭祀遺物類が大量に出土している。2基の瓦窯は約4mを隔てて斜面に並列しているが、南西側の1基が地下式有段登窯(窖窯)、北東側の1基が無床式の平窯と形態が異なる。調査の結果、この2基の瓦窯は、既に消滅したと思われていた下総国分寺東瓦窯跡の一部であることが判明し、その重要性から「下総国分寺跡附北下瓦窯跡」という名称で国指定史跡「下総国分寺跡」に追加指定され、保存されることになった。

北下遺跡の調査原因となった外かん道は、現在開通している三郷南ICから京葉JCTを経て市川市高谷JCTで首都高速湾岸線に連絡する計画で、千葉県内の計画路線の総延長は12.1kmである。この計画路線



- 1. 国府台遺跡 1-1. 国府台遺跡第13地点 1-2. 今回の調査地点 2. 国分遺跡群 2-1. 下総国分寺跡 2-2. 下総国分尼寺跡 3. 須和田遺跡 4. 上矢切南台遺跡 5. 下矢切東台遺跡 6. 稲荷作遺跡 7. 小塚山遺跡 8. 国分下台遺跡 9. 堀之内貝塚 10. 道免き谷津遺跡 11. 雷下遺跡 12. 北下遺跡 13. 後通遺跡 14. 菅野遺跡 15. 平田遺跡

第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡

のうち松戸市内に2か所、市川市内に9か所の埋蔵文化財包蔵地があり、調査が進んでいる。北から松戸市上矢切南台遺跡、下矢切東台遺跡(千教振2009)、市川市稲荷作遺跡、小塚山遺跡、国分下台遺跡(千教振2010)とつづき、この5遺跡は国府台と国分台を含む広義の国分台に立地する。そこから開析谷へ降りて道免き谷津遺跡があり、国分台東端の国分低地に面する微高地上に雷下遺跡と先述の北下遺跡が立地する。さらに南下して須和田砂州上には後通遺跡が、市川砂州上には菅野遺跡と平田遺跡がある。

国分台の5遺跡では、国分下台遺跡をのぞいて散漫ながら各時代の遺構と遺物が検出されているが、特に松戸市矢切地区の2遺跡では旧石器時代の石器群が充実している(千教振2009、2010)。道免き谷津遺跡は堀之内貝塚の南側斜面下に広がる低湿地遺跡で、第1地点から第5地点に分けられて調査が進捗している。平成16年度から17年度にかけて調査された第1地点(3)では、縄文時代晩期中葉の水場と思われる木組み遺構が検出された。雷下遺跡では、確認調査の結果縄文時代早期後葉の低地性貝塚の存在が明らかになっている。現在本調査が進捗しており、その成果が期待される。次の北下遺跡は先に紹介したとおりである。後通遺跡の立地する須和田砂州は、国府台から南東に延びる須和田台のさらに先端部に形成された小規模な砂州であるが、形成時期は市川砂州よりも古いとされる。須和田台の先端、須和田砂州の基部付近には明治期に国府台から遷された六所神社が鎮座する。後通遺跡では、砂州の上で奈良・平安時代から中世にかけての遺構群が検出されたほか、現地表下約4m付近からは市川貝層と呼ばれる自然貝層が検出され、その上面からは縄文時代後期の土器類とともにシカやイノシシといった陸獣骨も出土している。海退期の様相と須和田砂州の形成を検討するうえで、重要な資料となろう。さらに南下して市川砂州上には菅野遺跡と平田遺跡が立地している。この2遺跡は、現在の京成本線を境に便宜的に区分したものであり、本来は同一の遺跡として考えて差し支えない。数次にわたる調査の結果、古墳や同時代の集落跡が検出されているが、古東海道がとおっていたとされる古代の道路跡やそれに関連する同時期の遺構はみつかっていない。

参考文献

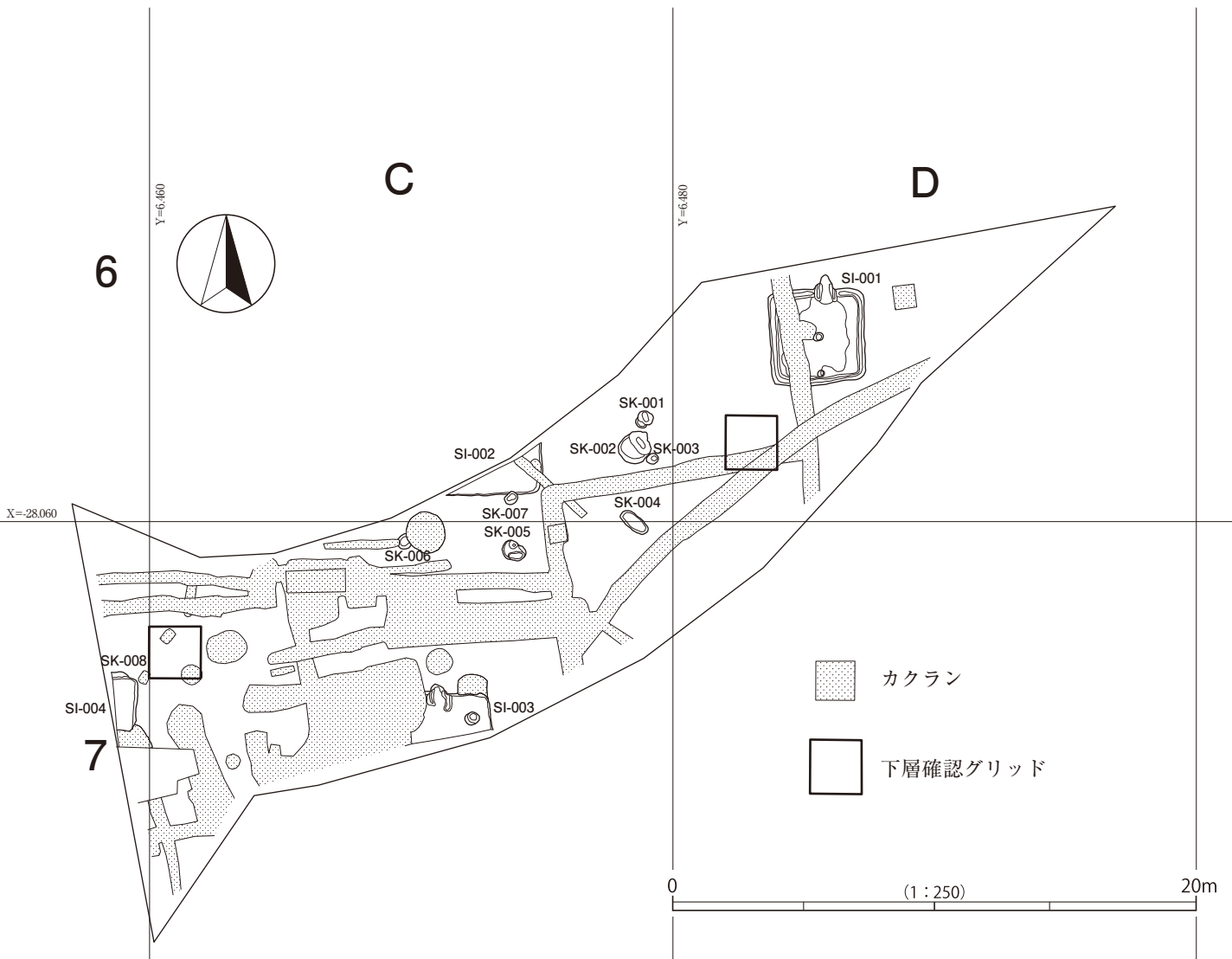
- 市川市教育委員会 2006『図説市川の歴史』
- 市川市教育委員会 2008『平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告』
- 市川市教育委員会 2012『平成19・20年度市川市内遺跡発掘調査報告』
- 千葉県教育委員会 2008『市川市北下瓦窯跡発掘調査概報』
- 千葉県文化財センター 2001『市川市国府台遺跡第13地点
- 国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書』
- 千葉県教育振興財団 2009『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書1 - 松戸市上矢切南台遺跡・下矢切東台遺跡 -』
- 千葉県教育振興財団 2010『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書2
- 市川市稲荷作遺跡・小塚山遺跡・国分下台遺跡 -』
- 千葉県教育振興財団 2011a『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書3 - 市川市北下遺跡(1)～(8) -』
- 千葉県教育振興財団 2011b『市川市国府台遺跡第13地点(3) - 地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書 -』
- 千葉県教育振興財団 2012a『市川市国府台遺跡第13地点(2)
- 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書1 -』
- 千葉県教育振興財団 2012b『市川市国府台遺跡第13地点(4)
- 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書2 -』

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 遺構

1. 竪穴住居跡

第1章でふれたとおり、今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡4軒、土坑8基で、いずれも奈良・平安時代に構築されたものである。多くの地下埋設物のため遺構確認面は激しく攪乱されており、土坑のような小規模な遺構は破壊消滅している可能性があるが、攪乱部分をのぞく立川ローム層の遺存状況は比較的良好であり、竪穴住居跡規模の遺構がまるまる破壊されている可能性は、遺構密度からみても低いと思われる。可能性があるとするれば、SI-003の西側に小規模なものが重複していた場合くらいであろう。



第5図 遺構配置図

SI-001 (第6・7図、図版2・5)

調査範囲の東側、6D-63グリッドを中心に検出された竪穴住居跡である。北西隅から南壁にかけて幅約80cmの埋設管による攪乱が横断しているが、北西隅と西壁は遺存したため規模の計測は可能であった。住居跡の中央やや西寄りにも床面を破壊する土坑状の攪乱がある。遺構全体が検出された竪穴住居跡は本跡のみであった。

平面形は一辺3.6mの比較的整った正方形を呈するが、北壁のほうが南壁よりもわずかに長い。北壁の中央やや東寄りにカマドが設けられ、南壁からカマド煙道部先端までは4.15mを測る。主軸方向はおおむね北であるが、わずかに西に振っており計測値はN-3°-Wである。床面は若干の凹凸はあるもののおおむね平坦で、中央部の広い範囲に硬化面がみられる。遺構確認面から床面までの深さは約40cmである。

遺構の覆土は上層がローム粒を多く含む暗褐色土、下層が焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土を基本とし、カマド付近では焼土粒やカマド構築材の砂混粘土粒が多くなる。壁溝部分の覆土はロームブロックを含み粘性の強い黒褐色土である。全体によくしまっているが、填圧の影響が強いため、本来の特徴を示すかどうかはわからない。

カマド部分をのぞいて幅が広く深い壁溝が廻っており、その規模は広い部分で約30cm、深い部分で約20cmを測る。4本柱になる場合の通常的位置には柱穴はなく、住居跡の中央に柱穴の可能性のある深さ40cmほどのピットが1基穿たれる。南壁中央付近の壁溝内側には入口梯子ピットと思われる深さ30cmほどのピットがある。

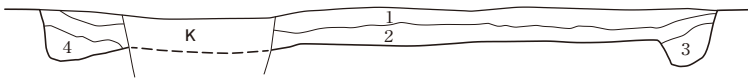
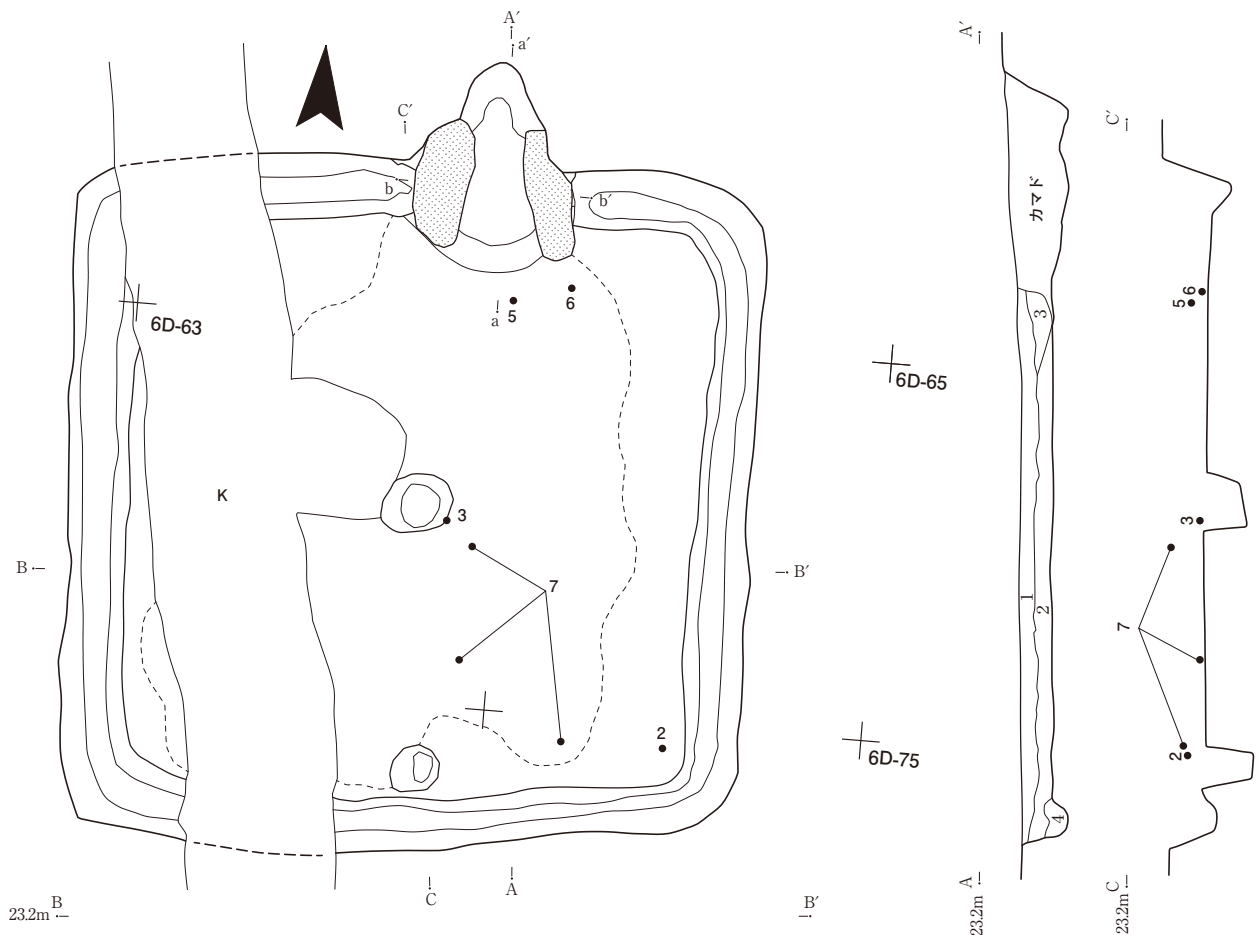
カマドは砂混白色粘土を主体とするソデの痕跡は残るものの、遺存状況はそれほど良好ではない。火床部は掘り込まれず、焼土の堆積や被熱赤化も顕著ではない。煙道部の掘り込みは急角度で、煙道として残す部分とソデを貼り付ける部分で掘り方の形状に変化をつけている。

出土した遺物は甕類が主体であるが、小片がほとんどである。1は緑釉陶器であるが、小片のため詳細は不明である。器種としては高台付きの皿と推測される。底部内面に沈線状の凹みが巡るのが特徴である。素地は軟質で、白っぽく焼き上げられている。釉薬はほとんど剥離しているが、淡緑色の色調を呈する。当住居のほかの遺物より時期的に後出であり、混入品と思われる。猿投産であろうか。2は推定口径13.9cmを測る須恵器の杯蓋である。天井部に回転ヘラ削りが加えられる。常陸産であろうか。3～6は土師器の甕である。3は口唇部が摘み上げられ、胴部下位に粗いミガキが施される。胎土中に雲母粒を多く含んでおり、いわゆる常総甕である。7は土師器甕の底部の小片である。

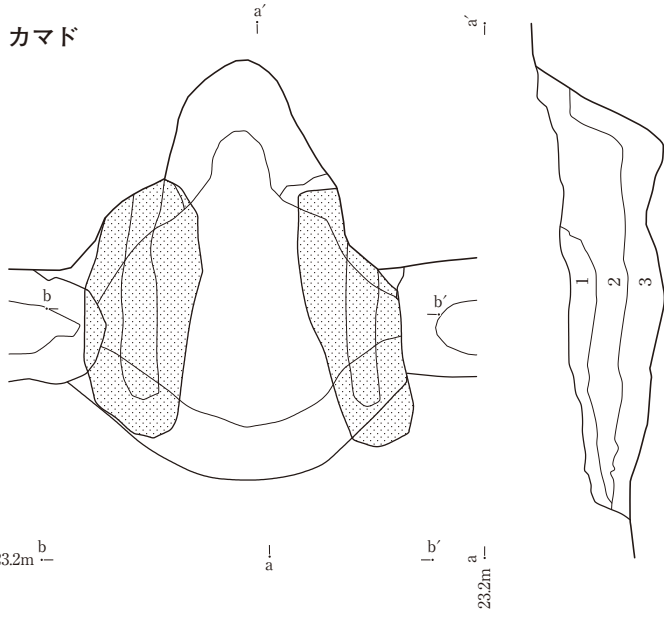
SI-002 (第8図、図版2・5)

6C-96グリッド付近で検出された。東壁約1/2と南壁のみので、北西側の約3/4は調査範囲外へ延びている。住居跡東寄りの床面と東壁の一部が、埋設管による幅30cm～40cmの攪乱で壊されている。

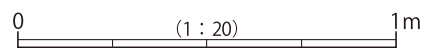
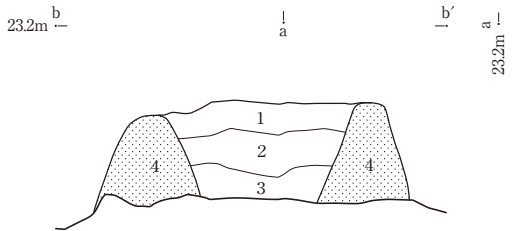
検出時には比較的プランは明瞭で、良好な遺存状況を期待して精査を開始したが、わずか2cm～3cmで床面に到達し、検出範囲のなかでは柱穴や入口梯子ピット、壁溝などの施設は検出されなかった。南壁、東壁とも完存していないため住居跡全体の規模も不明といわざるをえない。主軸方向は、南壁のラインから判断するとほぼ真北になる。掘り込みが浅いことから駐車場に起因する填圧が床面にまで及んでおり、硬化範囲の判別もできなかった。南壁に重複してSK-007が掘られており、土層断面から本跡のほうが古



- SI-001
1. 暗褐色土 径2~10mmのローム粒多量含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。粒子密。
 2. 暗褐色土 第1層に似るが、焼土粒をやや多く含み、やや暗い。
 3. 黒褐色土 径5~10mmのローム粒含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。粘性やや強。
 4. 黒褐色土 径5~20mmのローム粒・ロームブロック多量含む。粒子粗、粘性強。
- ※全体によくしまっているが、填圧の影響が大きいため、本来の特徴が不明。
- 0 (1:40) 2m

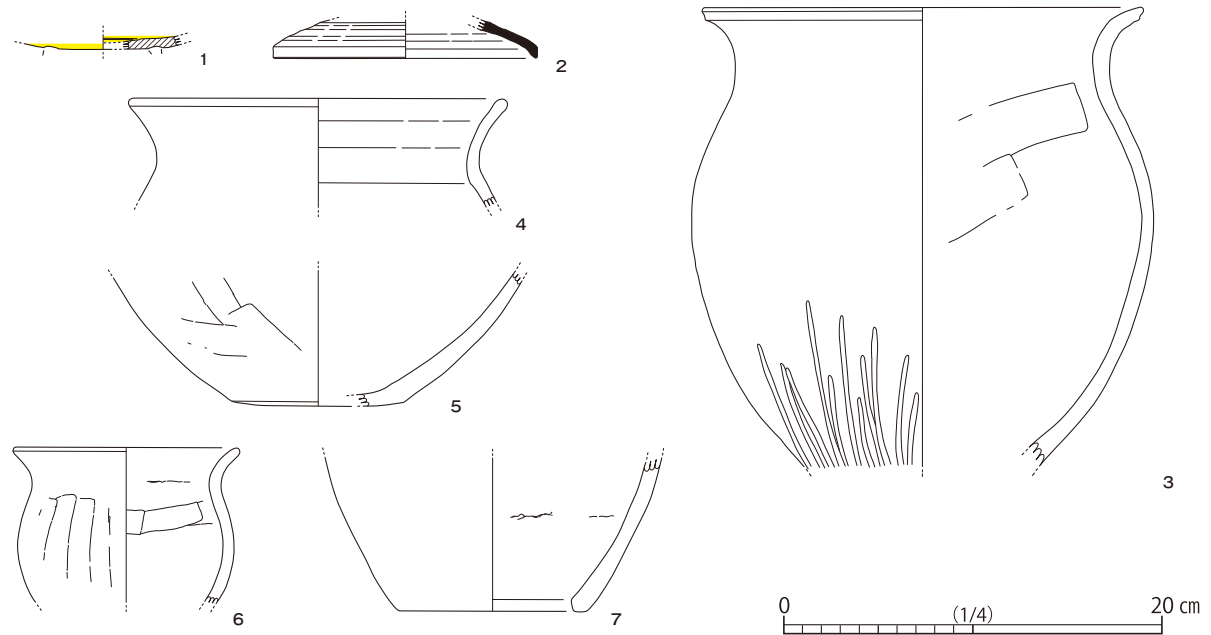


- SI-001カマド
1. 黒褐色土 微細なローム粒・焼土粒・炭化物粒含む。
 2. 暗褐色土 径5~10mmの焼土粒多量含む。径5mm程度のローム粒少量含む。
 3. 暗褐色土 径2~5mmのローム粒含む。焼土粒少量含む。粘性やや強。
 4. 暗灰褐色土 砂混白色粘土主体。径10mm程度のローム粒少量含む。ソデの痕跡。遺存はあまりよくない。



第6図 SI-001(1)

遺物



第7図 SI-001(2)

いと判断した。

遺構の覆土は、西側の約1/3がやや大粒のローム粒を含む褐色土、東側の2/3がローム粒のほかに焼土粒や炭化物粒も含む暗褐色土であった。

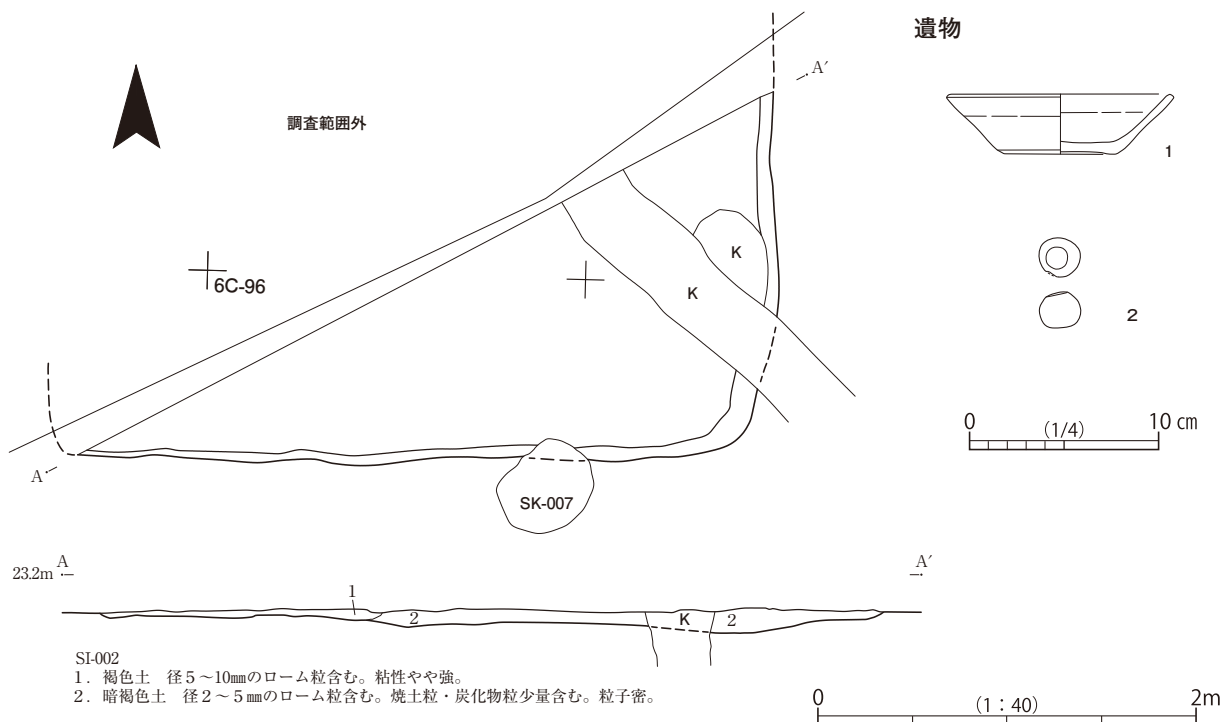
検出範囲がせまく、掘り込みも浅いことから遺物の量はわずかで、図示できたのは土師器杯1点と玉状の土製品1点の計2点に過ぎない。1は土師器杯で、体部が直線的に大きく広がる。底部は回転糸切りで、体部下端及び底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。体部内面下半から底部内面にかけて黒色の付着物がみられ、明確ではないがウルシの可能性が考えられる。2は両端が平坦となる土玉状の土製品であるが、穿孔は施されていない。

SI-003 (第9図、図版3・5)

SI-002の南方、7C-35グリッド付近で検出された。周辺は攪乱が激しく、わずかな空間に奇跡的にカマドが残っているというような状況であった。カマドの左右両側が攪乱されていたが、さいわい向かって右側(東側)の攪乱は浅く、北東隅と東壁は検出することができた。左側(西側)の攪乱は深く、カマドの左ソデは運良く完存したが、そのすぐ左側以西は完全に破壊されている。住居跡の南側約1/2は調査範囲外へと延びている。カマドが北壁の中央に設けられていると仮定すると、住居跡の規模は一辺3.8mほどの正方形が想定される。北壁のラインから判断すると、主軸方向はほぼ真北となる。

住居跡の掘り込みは、40cm～45cmと比較的深い。付近は今回の調査区の中なかでは比較的填圧による影響は小さく、確認面付近はかなりしまっていたが、覆土下層や床面までは影響は及んでいなかった。覆土はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土を基本とし、中位はやや黒味が強い。壁際にはしまりの弱い黒褐色土が堆積している。

住居跡の床面はやや凹凸があり、壁溝や硬化範囲は検出されなかった。北東隅から80cmほど内側に深



第8図 SI-002

さ50cmほどの柱穴があり、その位置から4本柱であったことがうかがえる。柱穴は抜き取られたようで土層断面に柱痕は残っておらず、覆土も粒子が粗くしまりのない層であった。

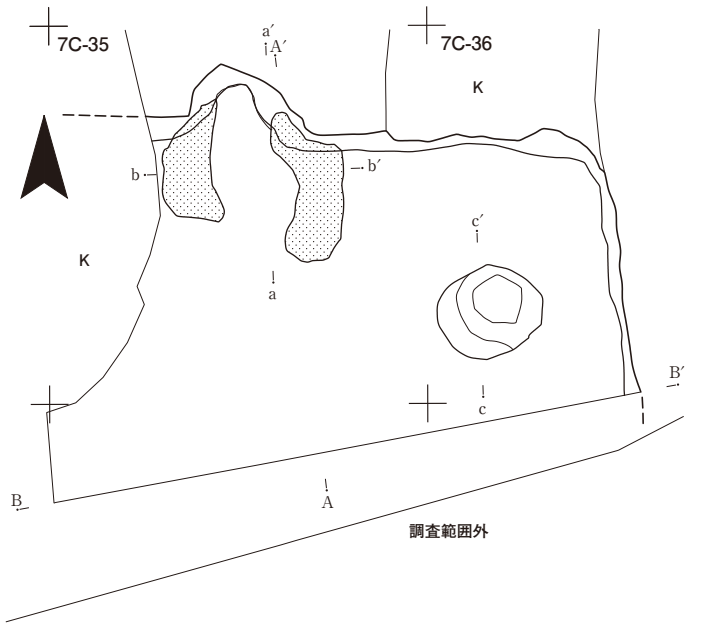
カマド内からは、つぶれた状態であったが2の土師器甕が完形で出土した。左ソデの遺存部上面からは1の須恵器杯が出土したが、器表や割れ口の表面に砂混白色粘土が大量にこびりついていることから、ソデの補強材であった可能性がある。遺存状況はSI-001よりは良好であるが、両ソデの遺存する長さが異なっており、きわめて良好というレベルではない。

遺物は、住居跡覆土中から微細な土師器片がわずかに出土したのみで、図示できたのは先のカマドに関連して出土した2点のみである。1は口径12.8cmを測る須恵器杯で、器面の荒れが著しいため、調整は不明である。胎土中に雲母を多量に含んでおり、常陸産の可能性が想定される。2は胴部が極めて薄く削られたいわゆる武蔵甕である。口縁部に輪積み痕が部分的にみられ、頸部にヘラのあたりを残す特徴を有する。頸部以下が黒変しており、カマドの掛け口に嵌め込まれていたものである。

SI-004 (第10図、図版3・6)

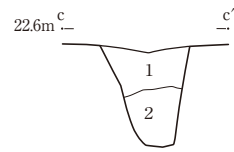
調査区の最西端、7B-39グリッド付近で検出された。住居跡の1/2以上は西側の県道方向へ延びているが、国府台病院敷地のフェンスがあるためこれ以上の拡張調査は不可能であった。また、住居跡の南側は埋設管の設置によって広く攪乱されており、さらに南側には市川松戸線の歩道際に建つ電柱の控えが埋設されているため調査することがかなわなかった。

かさねて、付近は陸軍病院時代の正門部分にあたることから、図版3・4にもみえるように表土中にはコンクリート舗装や基礎の砂利、門柱や塀に使用されたとと思われる大谷石や大型の礫などが大量に含まれ、また填圧によって確認面や覆土が硬くしまっており、調査は難航した。覆土の掘削には一部やむをえずジ



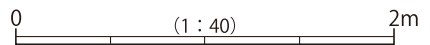
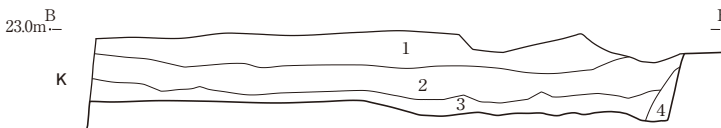
SI-003

- 1. 暗褐色土 径2~10mmのローム粒含む。粒子密。
- 2. 黒褐色土 径5~10mmのローム粒含む。ロームブロック少量含む。粘性やや強。
- 3. 暗褐色土 径5~20mmのローム粒・ロームブロック含む。粒子粗。粘性やや強。しまらない。
- 4. 黒褐色土 径5~10mmのローム粒少量含む。粒子粗。しまらない。

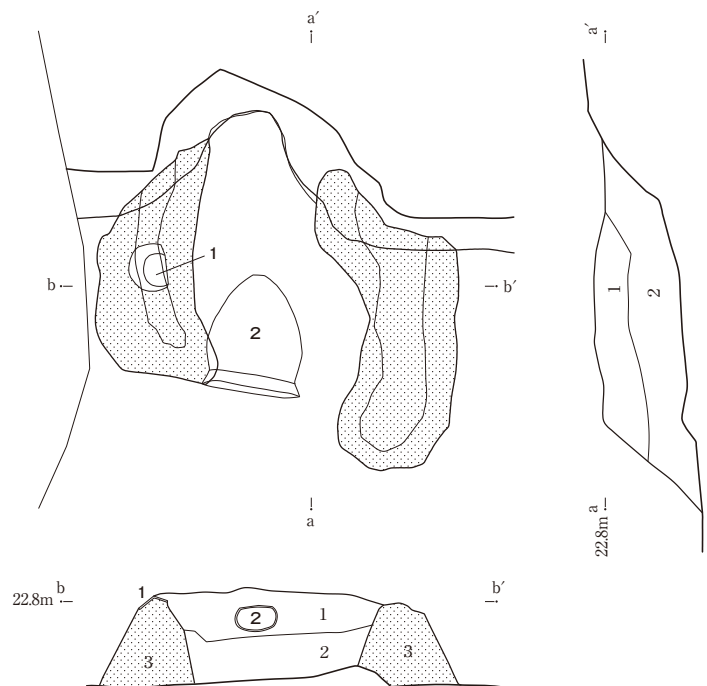


SI-003柱穴

- 1. 褐色土 径10~20mmのローム粒・ロームブロック含む。粒子粗。粘性強。しまらない。
- 2. 暗褐色土 径2~5mmのローム粒少量含む。粒子粗。しまらない。

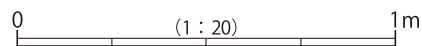


カマド

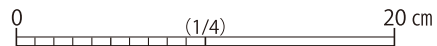
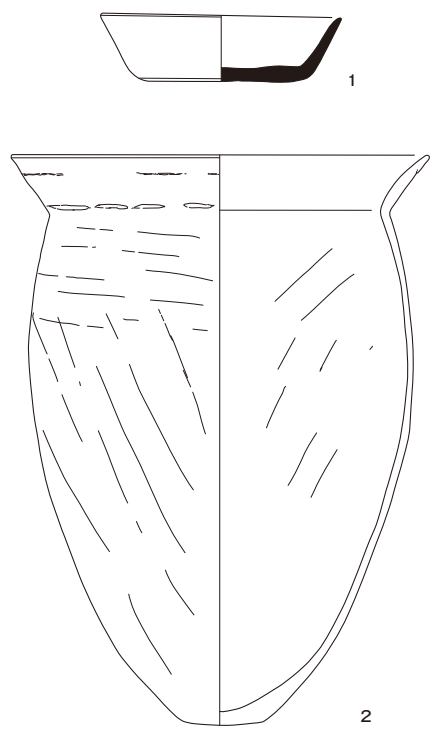


SI-003カマド

- 1. 黒褐色土 砂混白色粘土をブロック状に含む。径5~20mmのローム粒・焼土粒少量含む。
- 2. 暗褐色土 径5~20mmのローム粒・ロームブロック・焼土粒・焼土ブロック少量含む。粘性やや強。
- 3. 暗褐色土 砂混白色粘土多量含む。ロームブロック含む。ややしまる。ソデの痕跡。



遺物



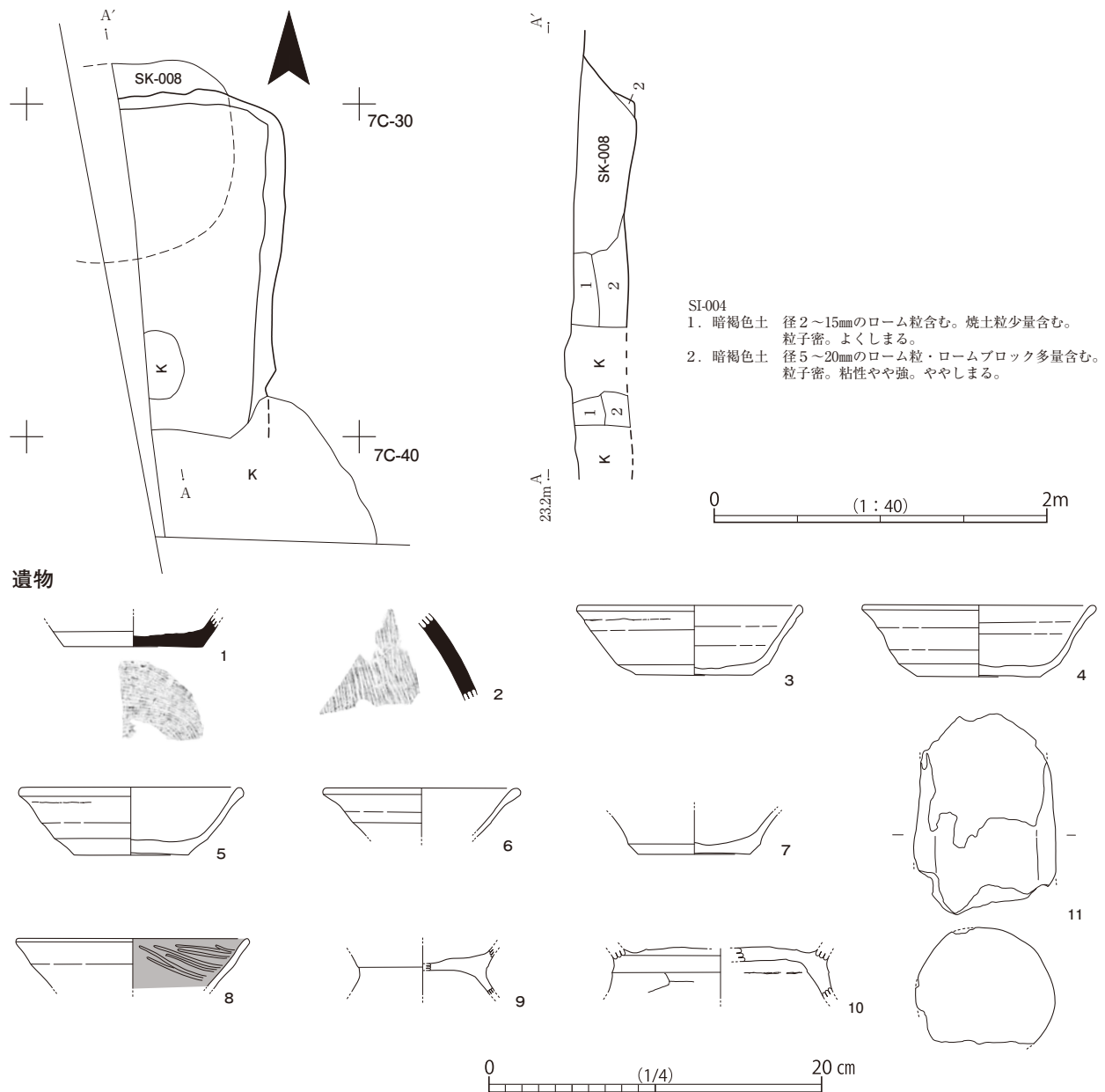
第9図 SI-003

ヨレンを使用し、遺物の多くは一括して取り上げざるをえなかった。

最終的に調査できたのは北東隅と北壁、東壁の一部のみであるため、住居跡の規模は不明とせざるをえない。東壁ラインから計測される主軸方向はN - 3° - Eである。調査の進捗に伴って北壁から遺存部分のほぼ中央にかけて新しい時期の土坑が重複していることが判明し、SK-008 というNo.を付したが、遺構精査の前半期には土坑の存在に気づいていなかったため、一部の遺物は混交した可能性がある。

住居跡の掘り込みは30cm～35cmで、覆土はローム粒を含む暗褐色土を基本とする。覆土上層には焼土粒を少量、下層にはロームブロックを多量含んでいる。床面は平坦であるが、填圧により全体にしまっているため硬化範囲の判別はできなかった。壁溝や柱穴などの掘り込みは検出されなかった。

今回の調査で検出された遺構のなかでは、主体が調査区外であるにもかかわらず遺物量は豊富である。ただし、先述のとおり調査条件から大半の遺物の出土位置は押さえられておらず、SK-008 との混交が懸念されるものも含まれている。1・2は須恵器の甕である。1は回転糸切り痕を全面に残し、胴部下端に



第10図 SI-004

回転ヘラケズリが加えられる。在地産であろうか。2の外面には平行タタキがみられる。3～8は土師器杯である。3～6は口縁部が肥厚する特徴を有する。5は直線的に体部が開き、6は小型で外反が強くなる。3～5とも体部下端及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。7も同様の調整がみられる。8は体部内面に粗いミガキが加えられ、炭素吸着による黒色処理が施される。9は小片であるが、いわゆる足高高台付き杯となろう。10は土師質の円面硯である。調整は比較的雑で、脚部の遺存が少ないため透かし孔の有無は不明である。11は支脚片である。これらの遺物のなかでは、6と9が後出の様相を呈しており、SK-008に含まれる土器と考えられる。

2. 土 坑

今回の調査では大小8基の土坑が検出された。なかにはピットとも呼ぶべき小規模なものも含まれているが、基数も少なく明瞭な境界線を設定できないことから、すべて土坑として扱うこととした。なお、第1章でもふれたとおり、今回の調査範囲はきわめて攪乱が激しいことから、破壊された土坑も多数存在したことが想像される。

SK-001 (第11図、図版4)

6C-79～89グリッドで検出された、小規模なピット状の土坑である。長径60cm、短径45cmの不整楕円形のピットの南西側に、足場状の浅い掘り込みが付随する。足場状の部分も含めた長径は最大68cmを測り、その方向を主軸とするとN-47°-Eである。

深さは最深部で32cmを測り、覆土下部の壁面付近にはソフトロームを主体とする暗黄褐色土が、上層から下層中央部にかけては黒褐色土や暗褐色土が堆積している。

遺物は出土しなかった。

SK-002 (第11図、図版4)

6C-98グリッドで検出された、やや大型の土坑である。長径1m31cm、短径1m13cmの不整円形を呈し、北東側が幅55cmほどの楕円形にやや深く掘り込まれる。長径を主軸とすると、N-48°-Eとなる。

土坑の深さは南西側の浅い部分で10cm～15cm、北東側の深い部分で22cm～25cmほどを測る。覆土は全体に茶色味が強い褐色土で、焼土粒や炭化物粒を含んでいる。

遺物は奈良・平安時代の土師器細片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SK-003 (第11図、図版4)

6C-98グリッドで、SK-002の南東側に接して検出されたピット状の土坑である。長径46cm、短径39cmの略円形を呈し、長径を主軸とすると、その方向はN-74°-Eである。検出したプランの規模や覆土がSK-001とよく似ており、距離も1.7mほどと1間に近いことから調査時には掘立柱建物跡になる可能性も考えたが、ほかに対応するピットは検出できなかった。

土坑の深さは約30cmで、覆土上層はローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土、下層はソフトローム主体の暗黄褐色土が堆積している。覆土最上層には焼土粒も少量含んでいる。

遺物は出土しなかった

SK-004 (第11図、図版4)

6C-99～7C-09グリッドにかけて検出された。長径1m20cm、短径54cmの長楕円形を呈し、主軸方向はN-50°-Wである。

深さは6cm～8cmと浅く、底面にはやや凹凸がある。覆土は単一層で、微細なローム粒を多く含む暗褐色土である。

遺物は奈良・平安時代の土師器や須恵器の細片が十数点出土しているが、図示できるものはない。

SK-005 (第11図、図版4)

7C-06～07グリッドで検出された土坑で、径70cm～90cmの不整円形を呈する。径は計測方向によってまちまちで、主軸方向は決定できない。SI-002の2mほど南にあたる。

深さは10cm程度で、底面にはやや凹凸がある。底面の北寄りには径35cmほどの円形に、南寄りには長径63cm、短径35cmほどの楕円形にやや深く掘り込まれた部分がある。覆土は全体に暗褐色土で、含有物の内容によって分層した。上層にはローム粒のほかに焼土粒や炭化物粒を少量含み、下層にいくほどローム粒の含有量が増加する傾向がある。

遺物は奈良・平安時代の土師器や須恵器が30点ほど出土しており、器種の判明するものも含まれているが、いずれも小片で実測可能なものはなかった。

SK-006 (第11図、図版4)

7C-04グリッドで検出されたピット状の土坑である。北東側を木根によって、西側を埋設管によって攪乱されており、わずかなすき間に奇跡的に遺存したといえる。略円形を呈し、計測可能な範囲から得られる径は55cmである。

深さは17cmで、断面形はボウル状を呈する。底面にはやや凹凸がある。覆土は上層がローム粒と焼土粒を少量含む暗褐色土、下層がローム粒とロームブロックを多量含む黒褐色土であった。

遺物は奈良・平安時代の土師器片や須恵器片が10点ほど出土しているが、いずれも小片で図示できるものは含まれていない。

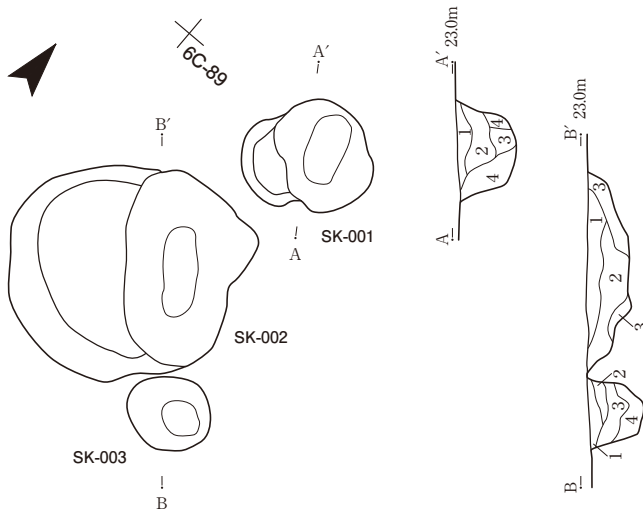
SK-007 (第11図、図版2)

SI-002の南壁と重複して6C-96グリッドで検出されたピット状の土坑で、土層断面から判断するとSI-002より新しい。平面形は、径42cm～51cmの略円形を呈する。規模や覆土の特徴が西南西に約4.5m隔てたSK-006とよく似ているが、関連性はうかがえない。

深さは35cmを測り、断面はボウル状を呈する。覆土は中位が暗く、上層には焼土粒を、下層にはロームブロックを含んでいる。

遺物は出土しなかった。

SK-001・SK-002・SK-003



SK-001

1. 黒褐色土 斑文状にロームを混入する。径2～5mmのローム粒少量含む。粒子密。
2. 暗褐色土 径5～20mmのローム粒・ロームブロック多量含む。粒子密。
3. 黒褐色土 径5～15mmのローム粒少量含む。粒子粗。粘性強。
4. 暗黄褐色土 ソフトローム主体。ロームブロック少量含む。粘性強。

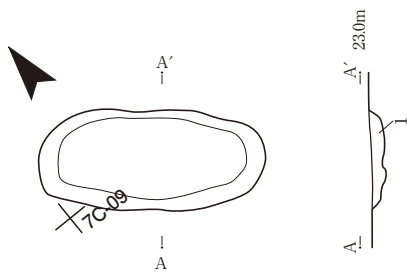
SK-002

1. 褐色土 微細なローム粒・焼土粒少量含む。粒子密。
2. 褐色土 微細なローム粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。粒子密。第1層に比し明るい。
3. 褐色土 径10～20mmのローム粒・ロームブロック含む。粘性強。

SK-003

1. 黒褐色土 径5～10mmのローム粒含む。焼土粒少量含む。粒子密。
2. 暗褐色土 斑文状にロームを混入する。径5～10mmのローム粒・焼土粒少量含む。粘性やや強。
3. 黒褐色土 径5～15mmのローム粒含む。粘性強。
4. 暗黄褐色土 ソフトローム主体。ロームブロック含む。粒子粗。粘性強。

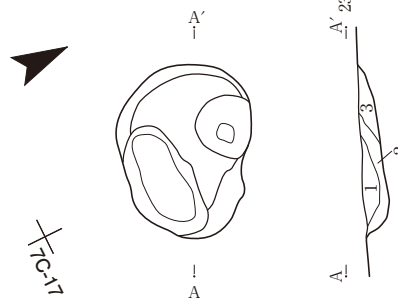
SK-004



SK-004

1. 暗褐色土 微細なローム粒多量含む。粒子密。

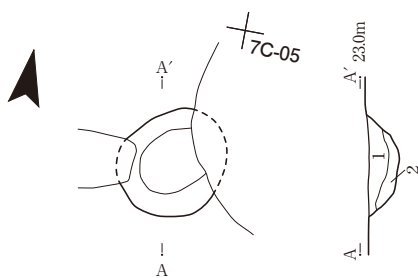
SK-005



SK-005

1. 暗褐色土 径5mm程度のローム粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。粒子密。
2. 暗褐色土 径5～20mmのローム粒・ロームブロック含む。焼土粒少量含む。第1層に比し暗い。
3. 暗褐色土 霜降り状にロームを多量混入する。第1・2層に比し明るい。

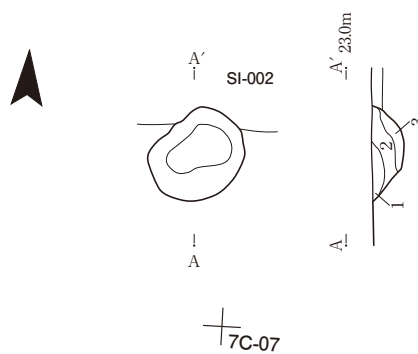
SK-006



SK-006

1. 暗褐色土 径2～5mmのローム粒・焼土粒少量含む。粘性やや強。
2. 黒褐色土 径10～20mmのローム粒・ロームブロック多量含む。粘性強。

SK-007



SK-007

1. 暗褐色土 径2～10mmのローム粒含む。焼土粒少量含む。
2. 黒褐色土 径2～5mmのローム粒少量含む。粒子密。
3. 暗褐色土 斑文状にロームを混入する。ロームブロック含む。粒子粗。粘性やや強。

0 (1:40) 2m

第11図 SK-001～007

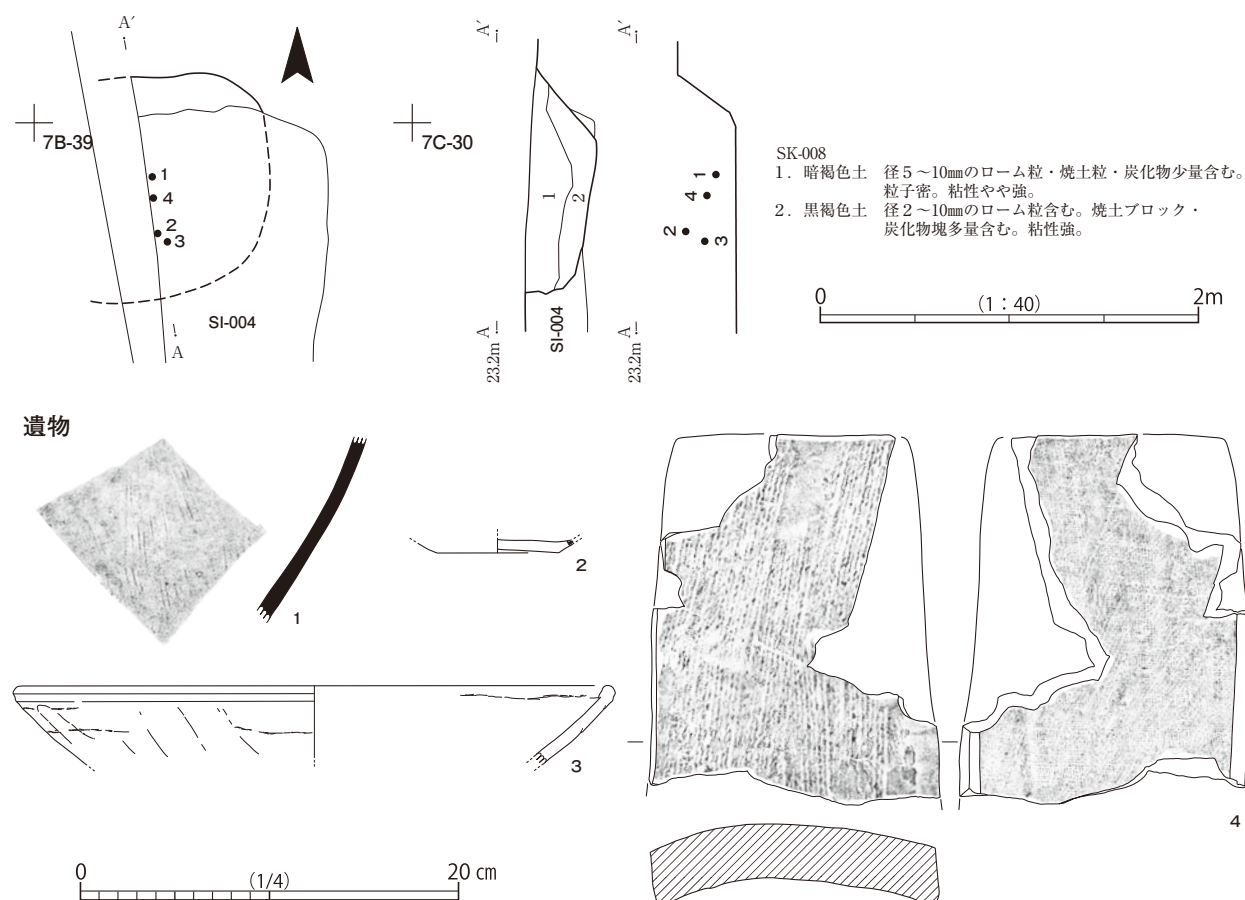
SK-008 (第12図、図版4・6)

SI-004 と重複して7C-39 グリッドで検出された土坑である。SI-004 の精査中、住居跡の北側に焼土や炭化物、遺物類が多いことには気づいていたが土坑の重複には気づかず、土層断面図作成の段階で土坑の存在を確認してSK-008 として分離した。そのため、一括遺物で取り上げた遺物のなかにはSI-004 と混交してしまったものもある。

遺物分布や土層断面から判断すると、おおむね1/2が検出され、残りは西側の調査範囲外に延びていると思われる。推定される平面形は径1.1 m前後の円形で、SI-004 の北壁上部をわずかに切っている。

深さはSI-004 の床面とほぼ同一で、30cm～35cmである。覆土は上層がローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む暗褐色土、下層はレンガ状に焼けた焼土のブロックや炭化材、炭化物塊を多量に含む粘性が強く漆黒に近い黒褐色土となっている。下層には焼土ブロックや炭化物塊とともに布目瓦や比較的大型の土師器片などが多く含まれており、火災にあった瓦礫を土坑内に廃棄したかのような様相を示している。

図示できた遺物は4点である。1は須恵器の甕で、不明瞭ながら平行タタキがみられる。常陸産であろう。2は土師器杯の底部で、体部下端及び底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。3は大型の鉢で、口唇部が内面に折り返されている。外面には幅広のヘラケズリが雑に施される。4は比較的幅広の切り熨斗瓦である。凸面には縄目タタキ、凹面には布目がみられる。

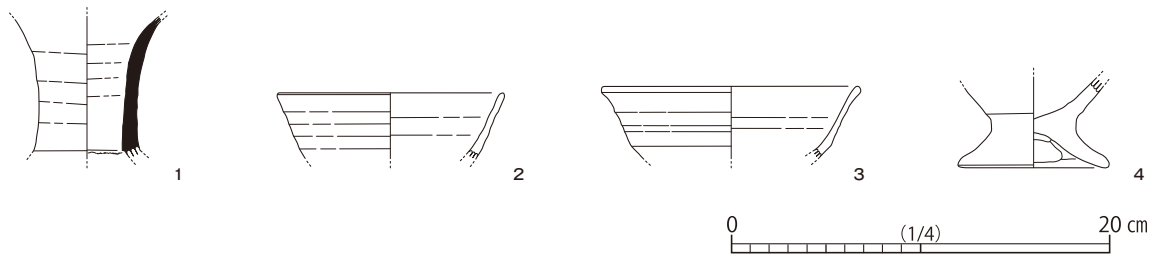


第12図 SK-008

第2節 遺構外出土遺物（第13図、図版6）

表土除去中や遺構検出作業時に遺構に伴わずに出土した遺物、および攪乱中から発見された遺物について取り上げておく。破片数にして50片程度と少なくそのほとんどは微細な破片であるため、図示できたのは4点に過ぎない。

1は須恵器の長頸壺で、口頸部のみの遺存である。口縁部は人為的に割られた様相を呈し、蔵骨器として利用された可能性が高い。外面半面に黒色の自然釉がみられる。2・3は土師器杯の体部片で、3の口唇部は肥厚して外反する。4は台付き甕の脚台部である。



第13図 遺構外出土遺物

第3章 ま と め

第1節 検出された遺構の変遷

今回の調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡4軒と土坑8基のみで、出土した遺物もそれほど多くないため、集落全体の様相を示すことは困難であるが、ここでは、本調査区の北側と南側に位置する比較的多くの遺構が調査された国府台遺跡第13地点(3)(以下13(3)と略称)(千教振2011)及び市川市教育委員会が調査した国府台遺跡第13地点-3(以下市13-3と略称)(市川市教委1999)の成果を加えて検討する。

1. 出土土器の変遷

編年の基準として、今回の調査区では遺構数が少ないため、13(3)で示された時期区分をあてはめることとする。ただ、この区分も13(3)の遺物に対して有効であるため、本調査区及び市13-3の年代観に適合しない部分もあるが、混乱を避けるために13(3)の時期区分を基準とする。今後多くの遺構が調査された国府台病院本体の報告が呈示された段階で再検討する必要がある。なお、松田礼子氏が下総国府の土器編年として、宮内編年をもとに国府台遺跡や国府関連遺跡の出土土器に検討を加えて詳細な編年を発表(松田2001)しており、その時期区分も併記しておく。

I期(7世紀末～8世紀初頭)

本調査区ではSI-001が相当する。年代を判断する杯がほとんどないため躊躇する部分であるが、やや古相の常陸甕と端部が折り返された須恵器蓋から判断した。13(3)ではSI006のみとされ、口縁部がやや内傾する丸底の土師器杯が存在する。松田編年では2a期となる。

II期(8世紀前葉～中葉)

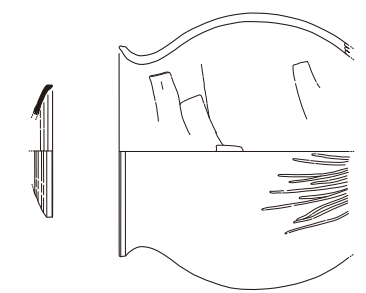
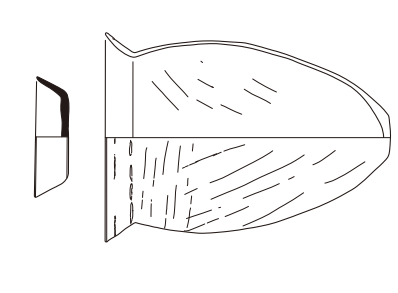
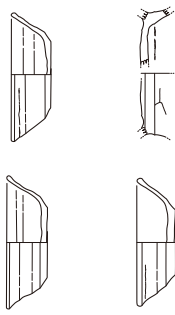

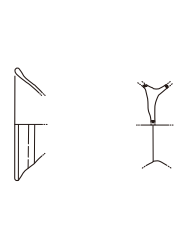
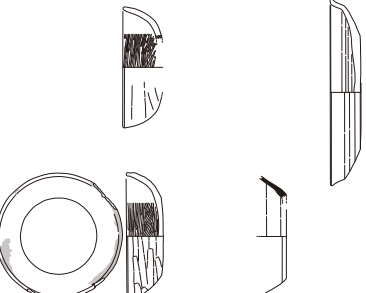

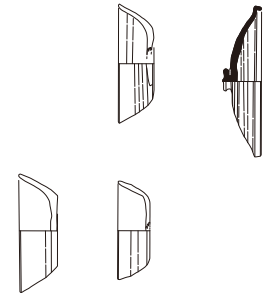
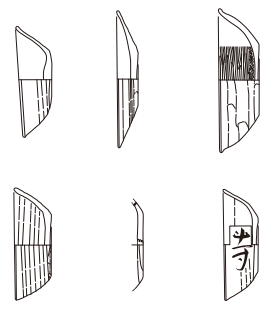
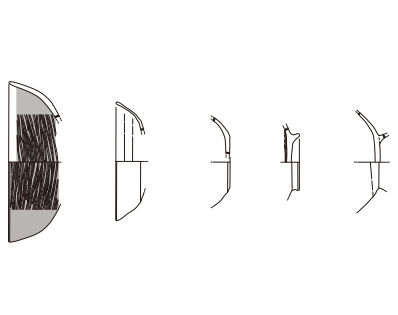
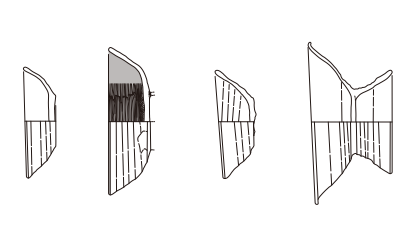
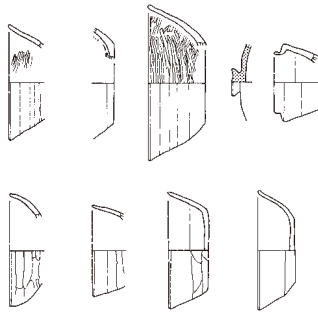
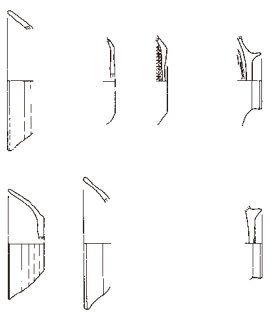
本調査区ではSI-003が相当し、常陸産あるいは下総産の底径の大きな須恵器杯及び武蔵甕が確認される。13(3)ではSI004、SB001・002とされているが、SI004は口縁部が短く直立するヘラケズリの杯や口径の大きな盤が出土しており、I期の新段階になる可能性が高い。松田編年では2b期となる。

III期(8世紀後葉～9世紀初頭)

本調査区には該当する遺構はないが、13(3)では中心的な時期としてSI001・003・009・011～013、SB001、SK002と多くの遺構が含まれる。箱形の杯と常陸産の須恵器杯・蓋が年代の根拠となる。SI001は人為的な遺構である可能性は低いとされており、遺物数も少ないため判断が難しいところであるが、SI011の全面手持ちヘラケズリの土師器杯と類似しているとされる杯は小型で底径が小さく体部が内湾気味に開くことからIV期に相当する杯と考えられる。また、SI011～013は3軒の切り合いがあり、多くの常陸産須恵器が出土したSI011は当該期の良好なセットである。松田編年では3a期に相当する。ただ、図示されたSI013の土師器杯はロクロ目が強く残り、口縁部が大きく開くことからV期の所産となる。

IV期(9世紀前半)

本調査区ではSI-004が当該期であるが、口唇部の肥厚や体部の開きなどからV期に近い様相を呈している。13(3)ではSI002・007・008の3軒が確認されている。この時期の杯の特徴は、前段階に比して口径と底径の差が大きくなり、体部が内湾気味に開くようになる。市13-3ではSI03Bで良好なセット

	I	II	III	IV	V	VI
13 (5)						
13 (3)						
市 13 — 3						

第 14 図 土器編年表

が出土している。この中にはⅢ期の箱形杯の要素を残すものも含まれており、本期の古相段階の所産と思われる。松田編年では4期となる。この3軒から出土した土師器杯をみると、SI002はやや新しい様相を示すものの当該期の特徴を有している。一方、SI007・008は全形をうかがえる資料がないが、体部の開きがかなり大きくなり、底部回転糸切り未調整や内面黒色処理の大型椀がセットとして含まれることなどから、一段階新しいV期の範疇に入るものと思われる。

V期（9世紀後半）

本調査区ではSI-002が該当する。杯1点のみであるが、前時期より口径と底径の差が大きくなり、体部が直線的に大きく開く特徴を有する。13(3)では遺構として存在しないとされているが、IV期としたSI007・008がこの時期に入るものであろう。市13-3のSI03Aもこの段階の土器群である。松田編年では5期の前半になる。

VI期（10世紀半ば以降）

本調査区のSK-008、13(3)のSK001と土坑のみから出土している。SK-008出土の土器からは判断が困難であるが、切り合い関係を有するSI-004の混入品とみられる新しい土器群がSI-004に属すると考えるならば、足高台付き杯や小型で直線的に大きく開く杯の存在などからこの時期に相当する可能性が高い。ただ、13(3)より古相を呈しており、SK-008は10世紀前半に近い様相を持っている。

2. 集落の変遷

きわめて限られた調査範囲のため、集落の全容を呈示できるほどの資料とはなっていないが、前述の土器の変遷から簡単にまとめておく。

住居の出現時期は、7世紀末から8世紀初頭の時期で、本調査区内のSI-001及び13(3)のSI004・006が該当し、住居の規模が比較的大きいという特徴を有する。この時期は、これまで調査された国府台遺跡全体を見渡しても7世紀後半から集落規模が大きくなる傾向が認められる。その後Ⅲ期にやや住居数が増えるものの9世紀後半まで竪穴住居が営まれ、10世紀以降は土坑のみの確認となる。国府台遺跡全体では集落規模は小さくなるものの11世紀段階まで集落が継続しており、13(3)を含めた限られた調査範囲内でも全体の様相の一端をうかがうことができる。

時期区分	年 代	第13地点(5)	13(3)	市13-3
I期	7世紀末～8世紀初頭	SI-001	SI004・006	
II期	8世紀前葉～中葉	SI-003	SB002	
III期	8世紀後葉～9世紀初頭		SI003・009・011	
IV期	9世紀前半	SI-004	SI002	SI03B
V期	9世紀後半	SI-002	SI007・008	SI03A
VI期	10世紀半ば以降	SK-008	SK001	

第1表 竪穴住居跡の時期区分

第2節 国府との関連

13(3)同様、国府との直接的な関連が想定されるような遺構は確認されなかったが、出土した遺物の中で緑釉陶器の皿と土師質の円面硯が注目される。皿はきわめて小片のため詳細に検討することは不可能であるが、国府周辺でも出土数は少なく、国府との関連を想定させるものである。一方、円面硯も官衙及び周辺遺跡に多く分布していることが指摘されている(小林 2006)。これによると、円面硯は県内 30 遺跡から 51 個体確認されている。分布状況をみると、国府台遺跡と周辺 2 遺跡から 7 個体、埴生郡衙跡と周辺 2 遺跡から 9 個体などと官衙及び周辺遺跡から全量の約半数の 25 個体が出土している。

遺構としては一般集落と何ら変わりがないが、緑釉陶器と円面硯の出土は、今回の調査区も国府と強い関係を有していた地域と考えることができる。今後刊行される周辺地域の様相を加味していくことにより、この一帯が国府域の中でどのような役割を担っていたのかが明らかになっていくことを期待したい。

参考文献

市川市教育委員会 1999「国府台遺跡」『平成 10 年度市川市内遺跡発掘調査報告』

小林信一 2006「Ⅲ下総地域の官衙関連遺物について」

『研究紀要 25 房総における郡衙遺跡の諸問題下総国を中心として-』千葉県教育振興財団

千葉県教育振興財団 2011『市川市国府台遺跡第 13 地点(3) - 地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書-』

松田礼子 2001「3. 下総国府の土器編年」『下総国府跡 - 国府台遺跡緊急発掘調査報告書-』市川市教育委員会

写 真 图 版



国府台遺跡第13地点(5)

遺跡周辺航空写真



SI-001 全景 (南から)



SI-001 カマド近景
(南から)



SI-002・SK-007 全景
(南から)



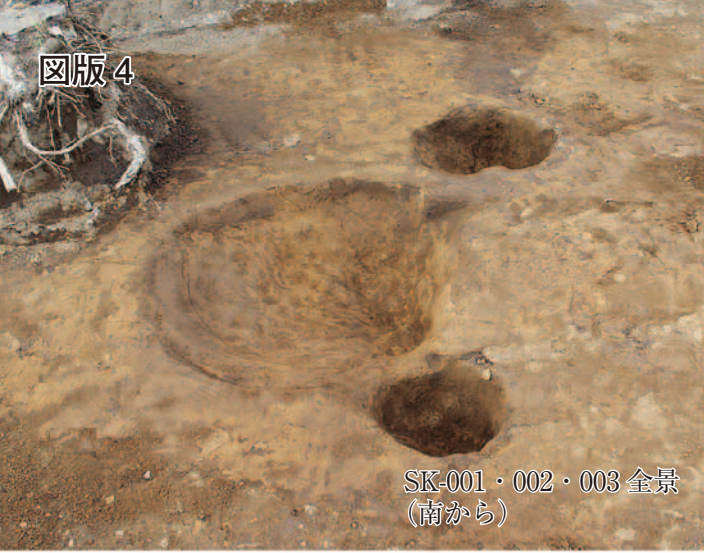
SI-003 全景（南から）



SI-003 カマド内遺物
出土状況（南から）



SI-004 全景（南から）



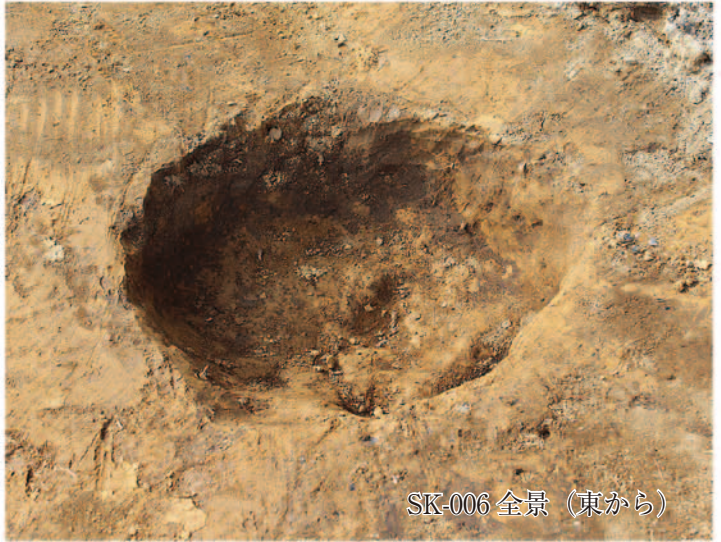
SK-001・002・003 全景
(南から)



SK-004 全景 (南東から)



SK-005 全景 (南東から)



SK-006 全景 (東から)



SK-008 セクション
(東から)



SK-008 遺物出土状況
(南から)

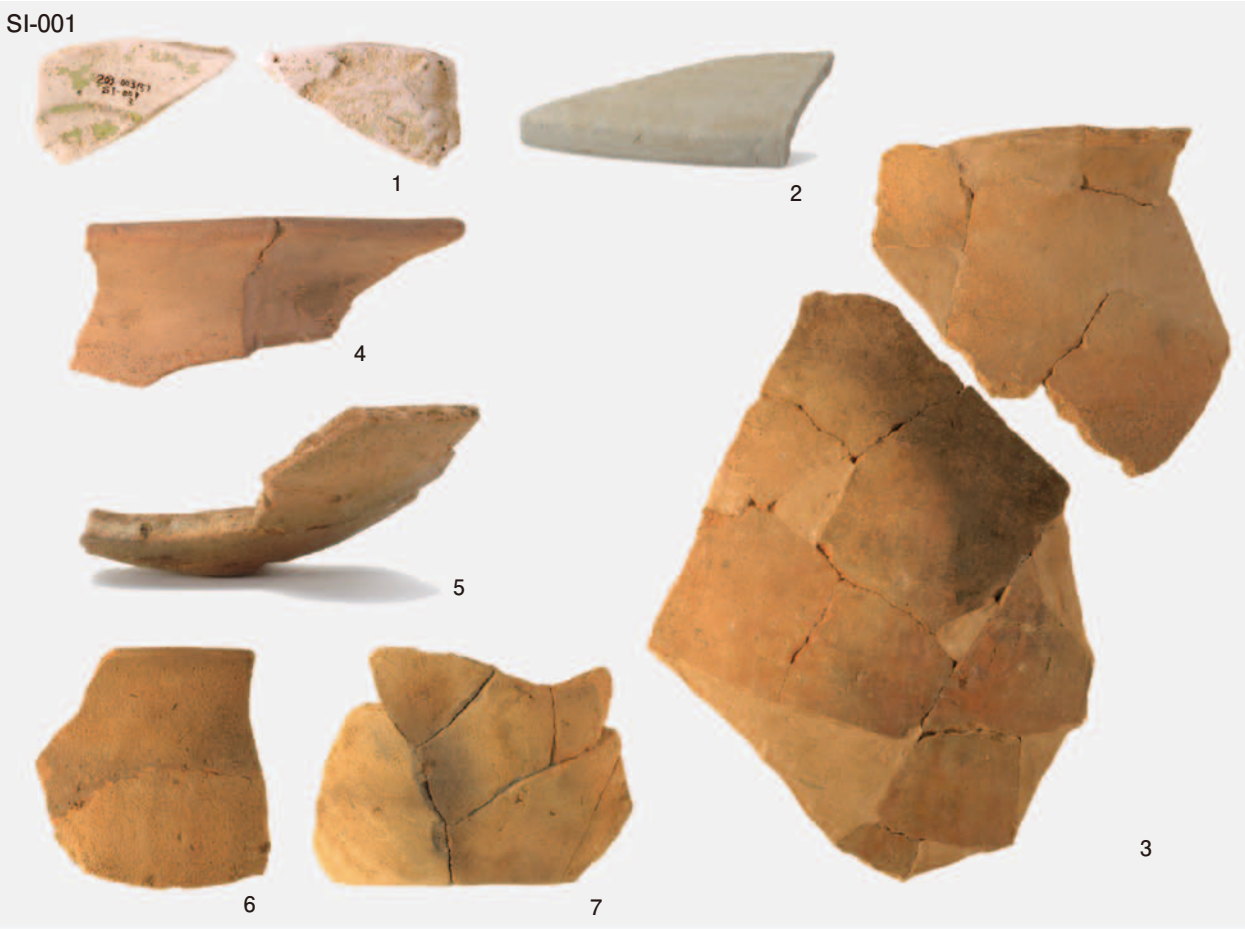


立川ローム層基本層序
6D-81 グリッド北壁 (南から)

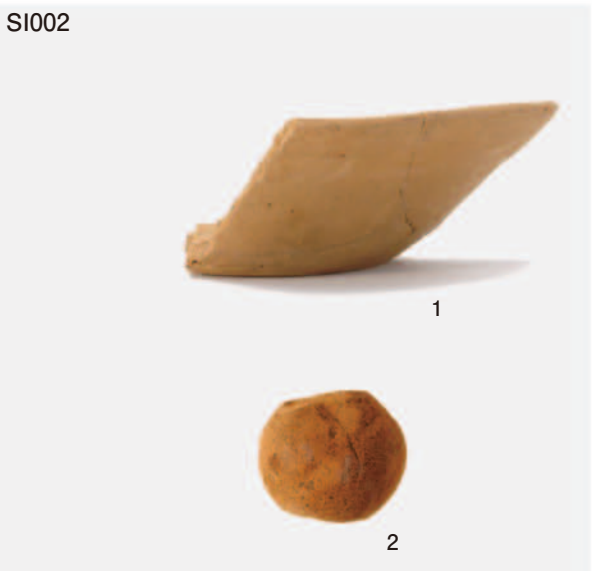


調査風景

SI-001



SI002

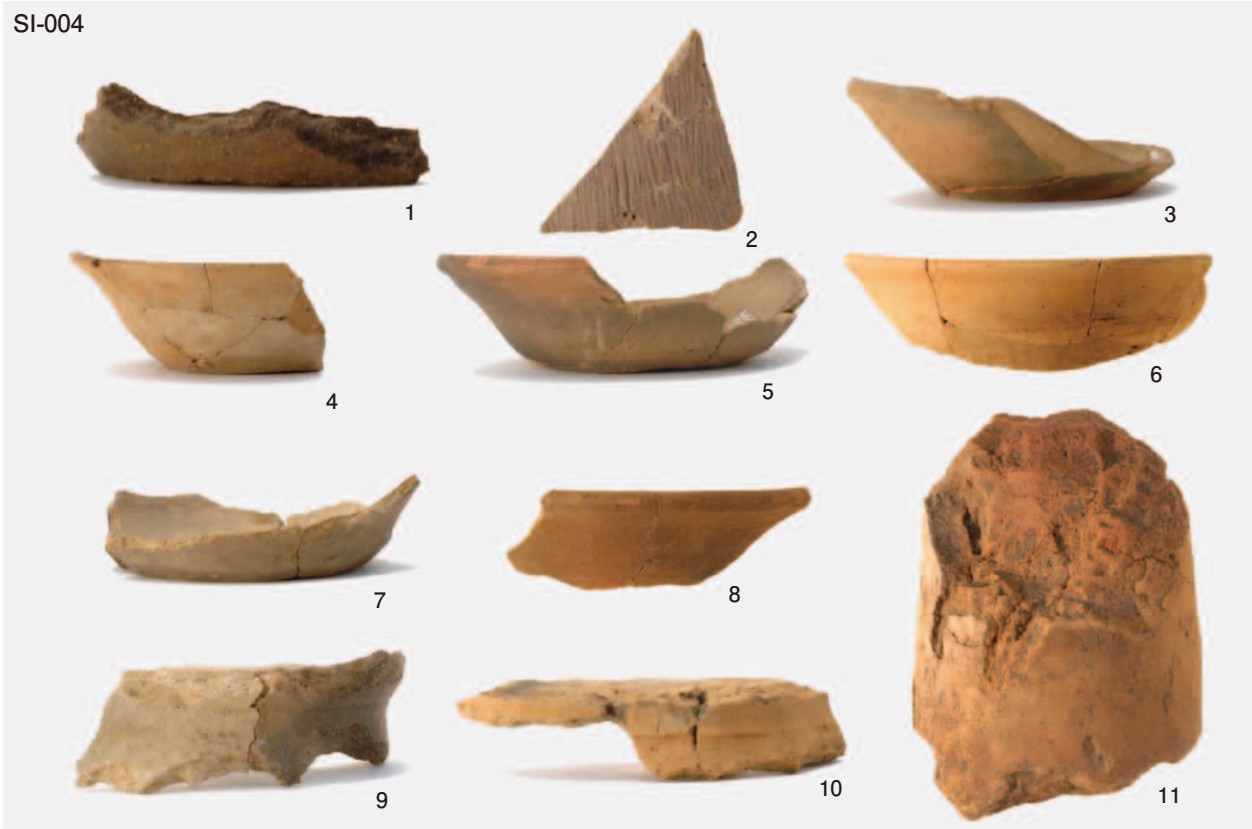


SI003



出土遺物(1)

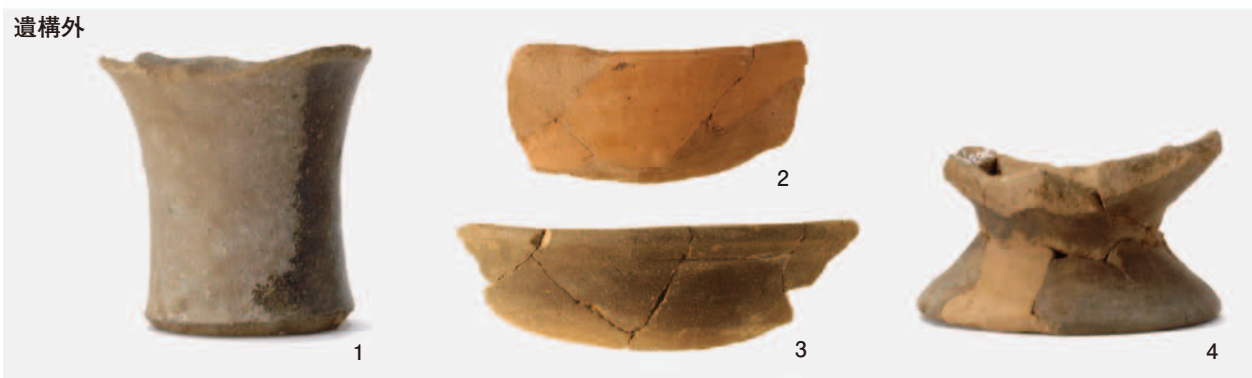
SI-004



SK-008



遺構外



出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいせいせきだい13ちてん(5)							
書名	市川市国府台遺跡第13地点(5)							
副書名	地域自主戦略交付金委託埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第710集							
編著者名	四柳 隆							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2				TEL 043 (424) 4848			
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうのだいせいせき 国府台遺跡 だいちてん 第13地点(5)	ちばけんいちかわしこうのだい 千葉県市川市国府台 いちちようめ 一丁目2-2ほか	12203	003(5)	35度 44分 50秒	139度 54分 17秒	20121001 ～ 20121031	325	主要地方道 市川松戸線 改良工事に 伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
国府台遺跡 第13地点(5)	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡4軒 土坑8基	土師器・須恵器・緑 釉陶器・瓦・土製品		特になし		
要約	下総国府推定地である国府台遺跡の調査で、国庁の推定地から約400m北側にあたり、常陸国へつづく古代官道に面する位置である。奈良・平安時代の竪穴住居跡が4軒検出され、そのうちの1軒から国府との関連をうかがわせる緑釉陶器皿の小破片が出土した。							

千葉県教育振興財団調査報告第 710 集

市川市国府台遺跡第 13 地点(5)
—地域自主戦略交付金委託埋蔵文化財調査報告書—

平成 25 年 3 月 15 日発行

編 集	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千葉県県土整備部 千葉市中央区市場町 1 番 1 号
	公益財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡 809 番地の 2
印 刷	株式会社 正文社 千葉市中央区都町 1 丁目 10 番 6 号